

故郷の未来を
あきらめたくない
廃炉の実現に
向かっていく

えんどう りょう
遠藤 瞭

新潟大学2年

平成12年(2000)、大熊町生まれ。

2019年3月、福島県立ふたば未来学園高校卒業(2期生)。

2019年4月、新潟大学理学部物理学科入学。

広野町に開校した「ふたば未来学園」に進学を決めたのは、

「復興の人材を育成する」との学校の方針を知ったから。

生まれ育った大熊町を、10歳のとき家族とともに避難しました。

会津やいわきをはじめ、さまざまな場所でたくさんの出会いとサポートを経験。

原子力発電所の存在が身近だったこともあり、いつしか

「福島第一原発の廃炉に携わること」が自分の将来の目標になりました。

そのきっかけの一つが高校時代の未来創造探求の授業。

私は「廃炉に向けた合意形成」をテーマに研究を続け、広野町や^{ならはまち}楡葉町で

行われたフォーラムでは、「処理水処分」の在り方についてなど、

自分の考えを発表する機会をいただきました。

ドイツなど数回の海外研修を含めて多方面から原発について

考えることもできたので、充実した3年間を送りました。

卒業後ももっと原子力について勉強したいと意欲が高まり、大学は理学部を選択。

廃炉については、今は保留になっている問題も今後はもっと表面化していくでしょう。

私は、故郷の未来をあきらめたくはありません。だから、ここに戻ってきます。

大学で学んだことを生かしながら、福島第一原発廃炉の実現に向かって

突き進んでいきたいと思います。



高校2年の時に東京電力福島第一原発を視察。
少しずつだが確実に進歩しているように感じた